以上で東西 12 km に亘つて 14 本発見されたことになる。現場は薪炭用などの雑木林か又は 7–8 年又は 20–26 年生位の松或は 10 年生位の杉林であるが手入が悪く相当雑木が混入している。第2地点はマダケの混入した雑木林である。この附近のフローラには何等特長的なものはないから，シラカバが遺存的なものとは考えられない。又生育地があまりに広い地域に亘つているので，意識的に移植，播種されたものとは思われないし，またその形跡もない。植林の際稚樹と共に持込まれたことも，育苗地との関係から可能性が薄い。シラカバの様に著しい樹肌を有するものが最近まで発見されなかつたのは不思議であるが，樹肌が固有の特長を現わす前の幼時に薪炭として切られたことも多いらしい。実際或ものは古い切株から出たヒコバエであつた。幹をしらべた 10 本のうち幹の年令は推定 4–5 年から 20 年位の間であるが，これは樹幹の年令であつて樹令ではない。したがつて案外樹令は古い。少くとも1本は結実した事実があるから，この地方で代を重ねて発芽したかも知れないし，分布は必ずしも新しくはない。

風や鳥による分布も当然考えられるのであるが，若しそうならもう少し広く関東各地に発見されてもよさそうである。この附近は利根川水系と江戸川水系との低く広い分水嶺の利根川寄りに当り，水系はすべて極くゆるやかな傾斜によつて手賀沼に導かれている。この附近の丘陵に入りこんでいる狭く浅い谷間はこの地方で入谷津（イリヤズ）と呼ばれているが，今迄発見されたシラカバのすべてがこの入谷津（海抜 10–15 m）に至近の丘陵（海抜 20–27 m）の上にあることは興味がある。シラカバが高地から渓流に沿つて山麓にまで分布していることはしばしば見ることであるが，この地のシラカバが利根川の上流から水流によつて運ばれた可能性もあると思われる。利根川は歴史的にしばしば水路をかえており手賀沼と現在以上に連絡が密であつたこともあり，近年には明治 23 年 8 月 21–23 日に 15 尺，同 28 年 8 月 9 日に 17 尺，同 29 年 9 月 10 日には 17 尺の増水の記録（千葉県東葛飾郡誌）がある，また昭和 16 年には柏，手賀沼間の県道に氾濫水がせまつたことがある。この様な事態は治水の進まない昔には今よりはしばしば起つたことであろうから，水による分布も否定は出来ない。

関東地方でシラカバが本来の生育地を離れて孤立的に発見された例は，五日市盆堀谷のもの（海抜 450 m，白井，久内など）練馬区大泉（海抜 50 m，前川）などがあり，又斎藤吉永氏は明治神宮社務所焼跡で幼樹1本を発見している。しかし最後者はその附近の人家に移植されたものもあるからその種子によつて分布した疑がある。いずれにしても本来の生育地から 90–110 km 以上も離れた上述の地に多数のシラカバが発見されたことは著しい事実と言わなければならない。

□奥山春季：**植物採集ハンドブック** 286，(索引) 86，15pp. (1953) 和田書店 (380円)

主要な採集地とその植物 (50pp.)，類似植物の検索表 (ca. 90pp.) 及び関東を中心とした約 3.000 種の植物名彙 (ca. 140pp.) からなつている。